

がなかったことや、アジア通貨危機のダメージが比較的軽く短期間でのV字回復がみられたことなどの経済的特色も、国土空間形成に影響を与えている可能性があり、これらの特色を本書の内容に反映させることでフィリピン経済の理解が深まるのではないかと考えられる。

次に、世界もしくはアジアといった広域の中でのフィリピン経済の特徴を明確にし、特に中国とインドを核とするアジア生産ネットワークにおいてASEANやフィリピンの位置づけを検討することも重要な課題であると思われる。本書における国内事情や周辺諸国との関係についての記載に加えて、それらの内容が世界やアジアにおいてどのような重要性をもつか、またその重要性がどのように変化しているかという考察が加われば、グローバル経済化が進む中での地域集中の重要性をより理解しやすく論じることも可能だったのではないかと考えられる。

さらに、アジア通貨危機以降の経済動向と国土形成についても本書のテーマになり得たのではないと思われる。マレーシアやインドネシアなどで行われているイスラム金融での短期資金流入規制とは異なる政策により、フィリピンでは通貨危機や金融危機のリスク回避を検討しており、その政策がアジア通貨危機後の経済回復やその後の経済発展に与えた影響も、本書のテーマを深める要素であったと思う。

しかし、上述のことは本書の価値を疑わせるものではなく、むしろ本書の内容が公表されたからこそ生起する課題である。このように、本書は魅力的なテーマを提示し、さらに海外研究を発展させるための礎となるものである。今後、このような空間的視点をもって経済発展を論じるための成果がより多く刊行されることが望まれる。

(橋本雄一)

田林 明・菊地俊夫・松井圭介編：『日本農業の維持システム』農林統計出版、2009年2月刊、484p., 5,600円(税別)

今、日本の農業・農村は、国際的競争や環境問題、高齢化など様々な課題に直面し、時代の大きな転換点にさしかかっている。農業のグローバル化が進む中で、国内の農業地域は構造的にも大きく改編され、同時に過疎化や高齢化により、これまで育まれてきた豊かで多様な農村文化やコミュニティは崩壊の危機に陥っている。こうした日本の農業・農村のあり方を検証し、その行く末を考える上での基軸を定めようとするのが本書の趣旨であり、日本の農業・農村の未来を積極的に切り開いていこうとする編者らの強い意欲を感じさせる力作である。しかも、統計的なマクロ分析に加え、詳細なフィールドワークをもとに、地域から日本農業全体を考えていくという地理学の特徴がフルに活かされた内容と構成になっている。

本書は大きく3部からなり、第1部では日本全体の農業の動向と農業維持の可能性を探るために、統計資料を用いた分析がなされ、農業の担い手として、①個別農家が自己完結的に、あるいは部分的に作業委託をしながら農業を維持するもの、②専業農家が規模拡大、施設の高度化を高め、自立農業経営を行うもの、③企業の経営を行う農業生産法人、④地縁的まとまりにもとづく集落営農、⑤委託を受けて農作業を行う農業サービス事業体が抽出される。さらに、農業の維持形態の地域差について、農林業センサスの中の農家や農業労働力、経営などの担い手に関する指標を中心に42の変数を用いた統計分析により、日本を12の農業地域に区分している。第2部では、この区分地域ごとに代表的な農業地域を取り上げ、それぞれの農業維持システムとその可能性について、詳細な実証的研究を行っている。そこでは借地によ

る規模拡大を図り、アメリカでみられるようなアグリビジネスとしての借地農業を確立させた農業法人（第4章東関東）や男性農外就業者に代わり、農業技術や経営の知識を継承し、地域農業の中核として活躍する女性農業者（第5章東海・南関東）など、いくつもの興味深い事例が提示される。さらに、農村の多面的機能に着目した観光資源としての農村空間のあり方（第6章東山）や集落営農、農業サービス事業体を例に、ソーシャルキャピタル論を援用した分析（第8章近畿）など、ポスト生産主義下の農業・農村維持についての考察が深められていく。最後に第3部で、これまでの分析をまとめる形で、日本農業の諸側面を要約し、その維持システムにおける地域的基盤を整理している。

ただし、本書は地域の農業に関する自然的、経済的、社会・文化的、政治的基盤といった諸条件を単に羅列したものではない。ソーシャルキャピタルやアクターネットワークなどの新たな枠組みを取り入れながら、地域の諸条件を紡ぐ役割を果たす担い手とその社会的ネットワークという人的基盤を重要視し、そこから農業・農村の維持シス

テムについて具体的な考察を行っている。こうしたマルチチャンネルの農業維持システムの解明は、前著『持続的農村システムの地域的条件』（農林統計協会、2000年）から続く、編者らの一貫した研究の流れであり、本書はその延長線上に位置づけられ、さらなる内容の深化が図られている。第8章北陸において、編者が「地域とはなれた農業は存続できない」と指摘するように、本書の根底には人と地域に対する実に誠実なまなざしが存在する。そこには編者らが、変化の大きなうねりの中に巻き込まれている日本の農業地域とそこにくらす人々の必死で切実な生きざま、そこから生み出される知恵や工夫、^{すべ}術を余すところなく拾い集め、新たな日本の農業像を組み立てていこうとする使命感にも似た強い意志を感じる。そういった意味において、本書は理論的枠組みと精緻な現地調査を融合させた農業・農村地理学の専門書として優れているだけでなく、地理学の原点から応用的側面まで幅広く示唆を与えてくれる好著といえよう。

（藤永 豪）